戦国大名領国の地域史的研究

稲葉継陽・吉村豊雄
青木勝士・鶴嶋俊彦

1．研究の目的

伝統的日本社会（近世社会）の特質は、村や町などの自律的団体が国や郡を枠組みとする行政機構によってゆるやかに統治されている点に見出せる。そうした構造が形成される起点は、16世紀における戦国大名領国の形成期に求められる。したがって、諸地域の戦国大名研究は、それら地域における近世的な社会の成立史論として展開されねばならないだろう。

戦国大名領国研究の固有の意義をこのようにとらえるなら、当該領国の村・町、諸領主の動向を軸に、地域社会の復元的研究と政治過程の動態的研究とを総合する方法が求められる。しかし、近年の熊本地域史研究の場において、また全国の学界動向においても、こうした研究が活発になされているとは言いがたい。

本研究は、戦国期に肥後国球磨・芦北・八代三郡に展開した相良領国をフィールドとして、諸文献史料、城郭遺構、考古学的成果、地名史料、石造物史料などを総合的に収集し、上記の研究方法によりながら相良領国地域の歴史的様相を解明しようとるすものである。

2．研究の経過

現在のところ、メンバーそれぞれの分担によって、文献史料の収集と城郭遺構等の調査・記録が進展しつつある。

青木は、「相良家文書」『八代日記』をはじめとする中世文献史料について、大名領国の中枢部、他領国と境界を接する境目地域のそれぞれに内容を区分し、系統だてて整理して、領国内外のミニマムな地域独自の政治動向の復元に成果をあげている。具体的には、相良領国の北辺に接し、同盟と敵対を繰り返す勢力の根拠地となった、益城郡の隈庄や堅志田地域に関する文献史料の収集と整理を完了し、あわせてこれら地域の城郭遺構や地名史料の収集にも着手している。

すでに鶴嶋は、三郡地域における相良氏の城郭遺構の悉皆的調査と記録に大きな成果をあげている。従来の熊本県域における中世城郭遺構の調査は充分とはいえなかったが、鶴嶋は、相良氏の本拠となった人吉城、八代城のほか、芦北郡の佐敷城、水俣城、八代郡北部の高塚城などの諸遺構、さらにこれら地域に多数存在する小規模城郭遺構の新しい縄張り図作成をすすめている。この作業と成果の集成・分析によって、相良氏が構築した城郭に共通する構造上の特質が解明され、同時に個々の城郭の地域における存在意義が明確にされて、全国的視野と地域的視野の双方から、相良領国の歴史的特質を描き出すことが可能になると考えられる。

さらに稲葉は、相良領国北辺に位置し、宇土郡の名和氏との争奪対象となった豊福領地域の領主と

村落について文献史料によって分析し、大名領国の中枢地域とは区別され、領土紛争の対象となる「境目」地域の歴史的特質、さらに村共同体の動向について見通しを得た。その成果は本巻収録の「戦国大名領『境目』地域における城と村落」にまとめられている。

また吉村は、『新熊本市史』収録の文献史料によりながら、17世紀初期の加藤領国の支配構造を分析し、村落支配のあり方や地域行政の枠組みなどについて、初期近世史の側から課題に迫ろうとしている。

3．研究の成果と展望

現在までの成果を簡単に述べれば、以下の2点となる。

第一に、文献史料と城郭遺構の調査によって、ひとくちに大名領国といっても、「中枢と境目」、「沿岸地域と内陸山間地域」などで領国支配上の差異があり、それらが政治的にも相互に影響しあっている状況が明らかになってきた。大名領国内の諸地域における支配構造や領主の存在形態のあり方を丹念に追究してゆく必要がある。

第二に、16世紀において、すでに近世の村につながる百姓の共同体が形成され、畿内近国の惣村と大差ない動向を示していたことが確認された点である。文献史料の再検討が要請される。

今後は、上記の2点に留意しつつ、さらに史料収集と分析を重ね、まずは相良領国内諸地域の歴史的特質を明確にし、それを相良領国地域論として総括することが必要である。その上で、全国諸地域で長期間にわたって蓄積されてきた戦国大名領国研究との比較作業を行う。それによって、従来はさしたる根拠もなく「後進地域」の枠に押し込められてきた中部九州の伝統社会論を組み立てなおすためのステップとしたいと考える。（文責・稲葉）